

「わたし／たち」が安全に語れる場所

『現代詩手帖』フェミニズム特集
(2022年8月号)が果たした役割

菊地利奈

Rina Kikuchi

滋賀大学 経済学部 / 教授

はじめに

2022年8月号の『現代詩手帖』は、「詩、ジェンダー、フェミニズム」という副題を持つ「わたし／たちの声」特集号だった。21世紀になっても、あるいは21世紀になったからこそ、フェミニズム特集を組むということは、いろいろな意味で困難で勇気がいることだ。「今更フェミニズムか」あるいは「まだ女たちは文句を言ってるのか」というため息が背後で聞こえる妄想にとらわれながら、しかし私にはどうしても伝えなければならない想いがあるという使命感を持って、私もこの号に寄稿した。

発売後、号をひらくと、ページをめくるごとに驚きの連続だった。こんなに多くの人々が、文学界でセクシュアルハラスメントを体験、あるいは実際に見聞きしているという事実。面識がある人もない人も、親しくお付き合いがあるあの人も、作品でしか知らないあの人も、みな、自分の体験を通して、怒りを、やるせなさを、困惑を、変えよう・変わろうとする意思を持っていることが、誌面から伝わってきた。半世紀近く生きてきて、フェミニズム研究をしている私でさえも「私だけではなかったのだ」と安堵したのであるから、若い人、問題のまっただなかにいる人であれば、きっとこの号に勇気づけられたに違いない。

一番大きな驚きは、私が「知らなかったこと」だった。この号には個人的に付き合いのある人々の名前もあるが、彼女たちの体験を私は知らなかった。フェミニズムに対して、どういう気持ちで書いているのかも、知らなかった。さまざまな会話を交したこともあったはずだが、そして、そのなかでジェン

ダーの問題があがったこともそれなりにあったはずだし、「うん、アレだね」と問題意識を共有していることはなんとなく理解していても、そこからさらに踏み込んだ体験談を披露したことも、披露されたこともなかったように思う。それが、この特集号には書かれていた。

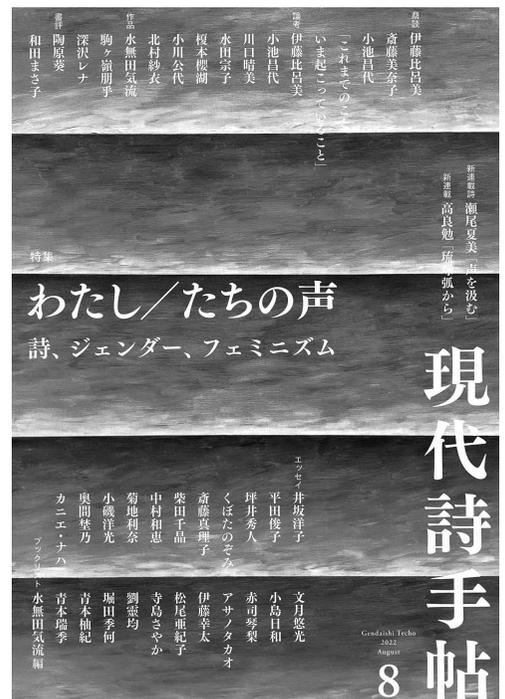
なぜ、それが可能だったのかと考えたとき、彼女たちが、私が、私たちが、身の危険を感じずに語れる空間をこの特集号が作り出してくれたからだ、と気がついた。同時に、普段の生活の中で、身の危険を感じずに、性被害について、あるいはセクシュアルハラスメント的な「もやもや」を、語るができる空間や場所が、ほとんどないことに気がついた。私たちが「ジェンダー」や「フェミニズム」について熱く語らないのは、セクハラや性被害に怒りをあらわにして泣き叫ばないのは、この社会にはそれらを安全にできる空間があまりにも限られているからなのではないだろうか。

I 「フェミニズム」内分断の問題

フェミニズム特集を組むのに勇気がいるのは、なにをどう書いても組んでも批判を浴びるからだ。第一に、フェミニズムは嫌われ、イヤがられている、という背景がある。それを象徴するかのように、この号の目玉企画である鼎談「これまでのこと、いま、起こっていること」は、詩人の伊藤比呂美(以下、同様に敬称略)の「フェミニズムって嫌がられている?」ではじまっている¹⁾。伊藤の問いを受け、文芸評論家の斎藤美奈子は90年代のフェミニズムブームの「バックラッシュ」が2000年以降おこり、「フェ

ミニズムに対する悪いイメージが意図的に」つくられてきたことを指摘している²⁾。詩人で批評家の水田宗子も、「フェミニズムへの度重なるバッシングにより」「フェミニズムの活動は低迷を続け」たと指摘³⁾、俳人の青本柚紀も「現在の詩歌をめぐる環境のなかで、フェミニズムはつねに逆境に立たされている」と明言している⁴⁾。

嫌がられているテーマで特集を組む、というだけでも勇気が必要なところに、さらに深刻な問題として、フェミニズム内の分断の問題がある。アンチフェミニズムの人々が批判してくる可能性はもち



図表1 ターコイズブルーの海原をおもわせる『現代詩手帖』2022年8月号の表紙

1) 『現代詩手帖8月号(2022年)』収録の鼎談「これまでのこと、いま、起こっていること」(pp.14-27) 伊藤比呂美、斎藤美奈子、小池昌代、p.14。以下、『現代詩手帖8月号(2022年)』からの引用は、その記事名や詩のタイトルと引用頁を記すのみとする。

また、英語圏では詩人の紹介やプロフィールで生年を書くことがほとんどなくなっている。出身国も書かない詩人が増えている。性別も同様で、She/Heを使うことを避け、プロフィールや名前から詩の書き手の性別がわからないようにしている詩人もいる。日本では、詩人を紹介するとき、生年と出身地か

ら始める形式が「デフォルト」になっているようだが、本稿では基本的に、すでに亡くなっている詩人以外には生年は記載しない。

2) 同鼎談p.15

3) 「世界戦争を経たフェミニズム表現—祖母と孫のフェミニズム」p.54

4) 「劇業としてのクィア・ライティング」p.86

ろんだが、それに加え、「フェミニストたち」からも批判がおきやすい状況がある。これが私が先に「なにをどう書いても組んでも批判を浴びる」と書いた理由だ。どうしてこのような状況に陥ってしまっているのか、「フェミニスト」という定義を軸に考えてみたい。

いったい誰、どんな人が「フェミニスト」なのだろう。そして、いったい誰、どんな人ならば、「フェミニスト」だと公言することを許されるのだろうか。斎藤美奈子が本号の鼎談で指摘しているように、フェミニズムの定義は時代とともに変わってきた。女権拡張を訴える怒れる女性たちをフェミニストと呼ぶ時代はとうに過ぎ去り、今では「性差別からの解放と両性ととの平等を目指す」運動がフェミニズムだと（少なくとも論理上は）認識されている⁵⁾。英語圏でもそれは同様で、2017年にアメリカの『ウェブスター辞典』の「今年という言葉」に「feminism」が選ばれたとき、その定義は「性差における政治的、経済的、社会的平等を訴える理論」となっており、「女性差別と闘う」という定義は二次的なものになっていた⁶⁾。

しかし、世間一般が考える「フェミニズム」のイメージは、依然「女」の闘いと捉えられており、それは日本だけの問題ではない。90年代に世界中でひろがった「怒れる女たち」の「ショートカット」「パンツスーツ」「未婚」「男嫌い」などといったイメージは今でも強く、フェミニズムとは、そういった女性が女権のために闘っている運動だと思込んでいる人々も多い。

上記のようなイメージは、フェミニスト女性 vs 異性愛者の男性という二項対立からできあがった

もので、だからこそ、「フェミニストはレズ（男性にとって性的対象者にならない存在）」だとか、「フェミニストはブサイク（ugly、男性から見て性的魅力を感じるような女性像から遠い存在）」⁷⁾という「悪口」が成り立った。時代はすすみ、男性にも「フェミニスト」だという人々が表れて久しいが、残念ながら今でもこのようなバッシングは存在する。そして、「男性はエセフェミニストである」とか、「男性はフェミニストになれない」などという議論はいまでも続いている。さらには、フェミニズムによって男性の権利がおかされていると主張する「男性人権運動（Men's Rights Movement）」もはじまり、むしろ状況が悪化しているように感じることも少なくない。

つい先日、オーストラリアの首都キャンベラで開催された国際詩祭Poetry on the Move Festivalで現代日本語女性詩の英訳に関するパネル発表をおこなったところ、シンガポールの男性詩人から「もし（男性フェミニストという存在が）許されるならば、私も（男性だけれど）フェミニストです」とコメントがあった⁸⁾。「大歓迎です。男性のフェミニストも、もっともっと増えてほしいと思っています」と答えたが、そのやりとりを通して、男性が公の場で「フェミニストだ」と立場を表明するときには、批判を浴びるリスクが大きく、表明することがはばかれる雰囲気があるというのが現状なのだ、ということを感じた。だから男性が、公の場で、堂々とフェミニズム議論に参加したり、自分がフェミニストだと表明したりするには勇気がいるであろうし、躊躇もするであろうし、フェミニストだと思われることを恐れる場合もあるかもしれない。女性でもフェミ

5) 前掲鼎談p.17

6) ウェブスター辞書での定義は「the theory of the political, economic and social equality of the sexes」となっており、従来の「女権のためにたたかう」（「organised activity on behalf of women's rights and interests.」）という意味はそれに付随する形で書き添えられている。BBCニュース「'Feminism' is Merriam-Webster dictionary's word of year」（2017年12月13日）<https://www.bbc.com/news/world-us-canada-42337596>（2022年9月30日）

7) 従軍慰安婦問題を扱ったドキュメンタリー『主戦場』でも、ある男性がフェミニスト女性たちを「不細工」を揶揄していたことから、ここではuglyを「ブサイク」と訳した。

8) この例に限らず、本稿では個人情報に配慮し、個人の名前や個人が特定できるような情報を限定的にしか記載しない。いつかこのような配慮が必要ではない「安全な社会」になってほしいと願う。

する女。結婚相手も、今の日本社会では女性は法律上「男」と結婚することになっており、結婚する・しないにも「男」がかかわってくる。収入の高い、あるいは「好条件」のそろった「男」に選ばれて結婚することが「勝ち組」。妊娠出産にも生理学上「男」がかかわっており、出産する・しないにも、(遺伝子学上のつながりがある子を持つ)母になる・ならないにも、「男(あるいは精子)」が不可欠だ。

また、これまで「女性」と「男性」というふたつの固定したジェンダーで考えていたこの性の問題が、シスジェンダー以外にもジェンダーがあると認識されるようになったことで、流動的になったことも重要な点だ。性(別)は固定されたものではないという認識は、性という縛りから私たち(女性に限らず人類全体)を開放した。フェミニズムやジェンダー学にも、新たな広がりをもたらした。同時に、残念なことに、今度は「男性フェミニストは存在するか・しないか」と同じ視点で、「トランス女性フェミニストはアリカナシカ」という目もあてられないような差別的な議論が展開されるようになり、世界中で物議をかますようになってしまった。

この現代詩手帖のジェンダー・フェミニズム特集号で、投稿者の多くがこれらの分断、あるいは二項対立問題に触れており、これを乗り越えなければならないと宣言していることは、大きな慰めだ。同時に、私たちが、なぜ、このように「分断」され、団結しにくい状況におかれてしまっているのか、私たちはどのようにこの問題を乗り越えていくことができるのか、改めて考えるきっかけを私に与えてくれた。

フェミニズム内のトランスジェンダー差別問題については、私自身がシス女性フェミニストであることから発言がためらわれ、発言をしないことに負

い目をずっと感じてきたが、榎本櫻湖のエッセイに勇気をもらい、ここに賛意と連帯と感謝を表明し、インクルーシブなフェミニスト運動につなげる一歩を踏み出したい。

II 「女性詩」「女性詩人」という カテゴリーがはらむ問題

この特集号では、80年代にデビューした「女性」の詩人たちが、「女性詩人」とひと絡げにされた当時の体験をトラウマのように語っている。小池昌代も、伊藤比呂美も、井坂洋子も、多くの賞を受賞してきただけではなく、文学賞の選考委員をつとめたこともある、「大御所」とも言える詩人であるが、80年代～90年代にかけての「女性詩ブーム」時にデビューしたことに、それぞれが複雑な想いを持っている。本号の巻頭詩「私には夢がある ― 声明のようなもの」の第一連で、伊藤比呂美は「詩人になりたかった。女性詩人になりたいわけじゃなかった。ただの詩人になりたかった」と書く⁹⁾。

「女性詩」あるいは「女性詩人」という言葉は、当然ながら「男性詩」「男性詩人」に対するものとして生まれた言葉だ。1920年代、女性が詩集を刊行しはじめた頃から「女」で「詩」を書く人は「女流詩人」と呼ばれるようになった。「男性ではない詩人」という意味だ。主流ではなく傍流として扱われていた女の詩人たちとその作品。1940年、6巻本からなるアンソロジー『現代詩人集』が山雅房から出版されたとき、まるでその7巻目にあたるかのように『現代女流詩人集』が出版された。ひとりひとりの写真つきで、詩人と作品が紹介された本アンソロジーには、深尾須磨子(1888-1974)、森三千代(1901-1977)、竹内てるよ(1904-2001)、永瀬清

⁹⁾p.10

子(1906-1995)等、15名の詩人が収録されている。「女」の「詩人」の作品もまとめておこう、というその「心遣い」ともとれる行為自体はありがたいと感謝するとしても、あとがきに「本女流詩人集は必ずしも先に刊行した『現代詩人集』の続刊ではない」と断っていることが気になって仕方がない¹⁰⁾。同じ形式でアンソロジーを7巻出版、一見女は最終巻にまとめて出版したかのようにみえるが、これは「続刊」ではない、という。つまり、これは「女流詩」をまとめたが、これらの女性の作品は「現代詩人集」と同系列にされては困る、ということなのだろう。「この巻にまとめた女の作品は傍流ですらなく、巻末付録にもならないのだから、勘違いなさないように」という注意書きのように見え、落胆してしまう。

「女流」という言葉が「女性」となり、「女性詩」「女性詩人」という言葉が定着したのは、80年代だろう。そうして、上述した80年代の「女性詩ブーム」にデビューした「女性詩人」たちの多くは、今なお、第一線で活躍している。その「女性詩人」たちが声をそろえて、「女性詩人」と一絡げにされてきたことに不満を訴えている。川口晴美は、「女性の書くものはイレギュラーで、“女性特有の感性”がポイントだったりして、別枠に押しやられたり、逆に珍重されてきたりしてきたと思う」と述べている。そしてそれは、「ステレオタイプなジェンダーのパッケージに入れられて」いる気持ちになる、という。井坂も、「80年代の『女性詩』のムーブメントについて質問されると、なぜ被告席に座らされている気持ちになるのか」と自問し¹¹⁾、平田俊子は84年に自分の第一詩集が「女性詩の現在」というシリーズから出されることになったときに「なんとなく抵抗」を感じたと吐露する¹²⁾。

それはそうだろう、と思う。「女性」詩人たちの作品が正當に評価されているとは言いがたいと感じ、「女性」の声を伝えたいと考え、その「多様性」に着目して「女性詩」の研究をしている私も、これまで何度も女性の詩人から「女性詩人」と呼ばないでほしい、と言われてきた。それは日本国内にかぎらずだ。もう20年ほど前になるが、アイルランドの詩人 Paula Meehanからも「私は詩人なのだから女性詩人と呼ばれるのはいやだ。社会派詩人であるとか、女性詩人であるとか、どんなカテゴリーにもあてはめられたくない」、と言われたこともある。それはもっともだと、私も思っている。

ではなぜ、私は「女性詩」研究をやめない、いや、やめられないのか。それはこの特集号に記載した通りだ。本音を言えば、「私だって」、とずっと思い続けている。私だって国内外で日本の詩人の作品を紹介するとき、この詩人は「女性詩人」と言わずにすむ日がきてほしいと思っている。国内では名前から性別を推測することが容易なので、敢えて「女性」と断らないことが多い私も、海外では、詩人の名前からだけでは作者が女性だとわからない読者を想定しているので、あえて「女性詩人」と明言するようにしているが、そんなことは不要になる日がきてほしい。わざわざ女性詩アンソロジーを組まなくても、アンソロジーの半分は自然と女性が半分を占める日がきてほしいと思っている。ただ、それが実現する日まではやはり、「女性詩人」と呼び続けるしか文学研究界で戦う術はないの感じ、「女性詩」あるいは「女性詩人」という言葉を使い続けている、というのが現状だ。もう何年も、果たして他のアプローチはないのだろうか、と考え続けてはいる。しかし、「ほら、ステレオタイプの<女性>や<母>や<娘>の像に当てはまらない女性の声

10)『現代女流詩人集』(1940年)の「後記」p.391。同アンソロジーに収録された女性詩人作品については、「Early Women's Poetry of the Asia-Pacific War」(彦根論叢, No.422)にて論じたので詳細は割愛する。

11)「それだけでなくはならぬ一個のことばで」p.70

12)「ハラスメントをなくしたい」p.71

がこんなにあるんです」と、「女性」の声の多様性を論じていくこと以外に、これというよい解決法は見つけられていない。

小池昌代は、『「女性詩」は死語となった』と書き、それでも「完全消滅したわけでもなく、いまだに使う人もいる」と述べている¹³⁾。私は、現状はもっとひどいのではないかと危惧している。一般誌のインタビュー等、いわゆるアカデミアや文学界の外で、「文学研究者です。特に女性の書いた詩の研究をしています」と自己紹介すると、「女流詩人ってどんな人がいるんですか」と質問されることは珍しいことではない。日本国内では、「女性詩」どころか「女流詩」で時がとまっているのか、と愕然とした体験が、2010年以降にも私には何度かある。

1970年代に数年にわたって出版された中央文庫シリーズに『日本の詩歌』がある。その第27巻は、現代詩に特化している。そこに収録された65名中、女性詩人は10名だ。解説を書いた村野四郎は「十名もの」と豪語している。この数字のアンバランスさにはここではあえて触れない。聞きたいのは、この10名の女性詩人らの掲載のされかただ。この10名の女性詩人らはまるで巻末付録であるかのように、この文庫の最後に束になってまとめて掲載されている。この差別的な、いかにも付録的な、見下した掲載方法に、男性の詩人や男性の研究者は違和感を抱いたことがないのだろうか。

私は英語圏で日本の女性詩の作品を紹介することに力を注いでいるが、これは言ってみれば、アイルランドの劇作家作品がアイルランドで評価されるには、一度アメリカに「輸出」され、ニューヨークでヒットしてからアイルランドに「逆輸入」されなくてはならない、という風潮の応用だ。日本国内で、公平に評価されているようにはみえない女性詩人

らの作品が、英語に訳され、そこからさらに他の言語に訳され、世界で定評があるということになれば、日本での彼女たちの評価もあがるのではないかとくろんでいる。日本でたとえ正当に評価されにくくとも、日本語女性詩作品には、海外に読者がおり、よりひろい世界があることを証明するのが、私の願いだ。

これは、上述の伊藤比呂美の詩「私には夢がある—声明のようなもの」の最終連、「詩の批評や、詩人の集まりや、詩集の出版や、詩の賞の選考で、性差別はなく、性差を利用されることもなく、別枠扱いにされることもなく、そしてもちろん性暴力もなく、そしてついでに年齢の差別もなく、詩人たちがそれぞれの文化や価値観や方法に誇りを持ち、違う文化や価値観や方法に共感を持って、詩を書きつづけていく」、あるいは「詩を読みつづけていく」ことにつながっていると思っている。

Ⅲ 性の多様性に「女性詩」や「フェミニズム」はどう向き合うか

「女性詩」を研究し、「女性詩人」という言葉を使うことは、皮肉にも、さまざまな問題と分断を生み出してしまふことにもつながるといふ葛藤をかかえているわけだが、この言葉はさらに「トランス女性」と「シス女性」という新たな分断を生み出してしまっている。『ハリー・ポッター』の著者J. K. Rowlingの「トランス女性差別発言」にもみられる、フェミニスト内でのトランス差別問題だ。

「トランス女性はフェミニズムを脅かす」という差別的発言もあり、世界的な議論をよんでいる。シス女性フェミニストが、トランス女性フェミニストを差別し排除することで、私たちは新たな分断を

13)「今、曲がり角を曲がっている私(たち)」p.28

生み出してしまっているのだ。トランス女性フェミニストもシス女性フェミニストも、ヘテロセクシュアルなシス男性から差別され、見下され、性差別と闘おうという点で手を取り合えるはずなのに、なぜ、分断がおきているのか。

これは、文学市場の構造にも関連しているように私は考えている。文学にも流行廃りがあり、今、世界文学、特に英語圏の文学市場で人気がある、つまり「売れる」トピックは、eco-poetry などと呼ばれる環境文学か、あるいは女性、LGBTに代表されるようなジェンダー関連だ。芥川賞を受賞し、その後さまざまな言語に翻訳された村田沙也加の『コンビニ人間』の英訳が『Convenience Store Women』となっていることは国際的な議論を呼んだが、「アジア」の「女性(作家)」の「女性性(を強調した)」作品が売れる、というマーケット事情が絡んでいることは間違いがない(もちろん翻訳上、women を human や person に入れ替えることは難しい、という問題もあり、私自身は適切な英訳タイトルだと評価している)。

このようなマーケット需要は、私自身にも体験がある。3、4年前、アメリカの詩誌で「日本女性詩」特集を組む話があがったとき、「トランス女性の作品やレズビアン女性の作品を入れてほしい」と注文がついたのだ。なぜ文学(批評)界は、これほどにカテゴライズすることにこだわってしまうのだろう、と思わずにはいられなかった。私にとって、トランス女性も、レズビアン女性も「女性」だ。よって、彼女たちが詩人であれば、私は彼女たちを「女性詩人」とみなし、「女性詩」アンソロジーに収録している。もちろん、「女性詩アンソロジー」に収録させてもらいたい、と連絡して許可をもらっているが、それは彼女たちがシスヘテロ女性ではないか

らではない。翻訳には著作権の問題が絡むため、当然ながら、トランス・シス、ホモ・バイ・ヘテロセクシュアルに関係なく、すべての詩人から翻訳許可と掲載許可をいただいている。ノンバイナリーの詩人についても同様だ。「女性詩」特集であるけれども、載せていいか、ご本人の許可を得ている¹⁴⁾。

私の場合は、翻訳者、編者、また、「女性詩」研究者として、どうしてもフェミニズム色が濃い(と、私が考える)詩作品を取り上げることが多くなる。私にとって、その詩作品を書いた詩人が、トランス・シス、ホモ・バイ・ヘテロセクシュアル・ノンバイナリーかというのは、その詩人の出身地がどこかにどれほどこだわる必要があるのか、という問いに似ている。沖縄戦にフォーカスをあてた詩集を何冊も出している網谷厚子が、沖縄出身ではなく茨城の出身である、ということは、研究にも読者にも重要であろうから作者・作品紹介に記載する。また、関東大震災後、都内で起きた朝鮮人虐殺について、「私が毎日散歩をしている川辺で起きた出来事」という視点から描いた、石川逸子の詩「あなたに」を読むとき、石川が詩中にでてくる中川の近所の出身で、今でもその地に住んでいることを知っていることは重要だ。このように、詩作品理解に必要なと思われる詩人情報を、解題で説明するのは、翻訳者であり文学研究者である私の責務だ。

しかし、詩人本人の出身地がほとんどまったく関係ない作品であれば、わざわざ出身地を説明する必要はないはずだ。同様に、この(女性)詩人が、トランス・シス、ホモ・バイ・ヘテロセクシュアル・ノンバイナリーかということが、ほとんど関係ない詩作品を論じる(あるいは、翻訳する)場合、そのことをあえて言及しなければいけないいわれはない、と私は考える。上記のアメリカ詩誌の『現代日

14) 上述したように、このプロセスの中で「女性詩アンソロジーか…」と「女性詩」という言葉にひっきりやわだかまりを示す詩人もいる。それは、トランスかシスかなどにかかわらず、である。ため息まじりのあきらめを持って収録を許している場合も、私が思っている以上に多いのかもしれない。また、許可をもらったからといって、許可を出してくれた詩人たちに

責任をおしつける気は毛頭ない。

本語女性詩人』特集には、結果として、シスヘテロ女性以外の詩作品が収録されることになり、現在その方向で調整している。しかし、彼女たちが「シスヘテロ女性詩人」以外だったから収録されるのではないし、ジェンダーについて、私は詩人紹介でも触れていない¹⁵⁾。

女性の多様な声を伝えたいと、「女性詩」を英訳したり、「女性詩」の研究発表をしようと「女性」を用いた言葉を使ったその瞬間に抱えてしまうこの問題から、どう抜け出せるのか。女性の詩人にのみ「女性」と冠をつけ、男性の詩人にジェンダーをしめす形容詞が見つからないこともバランスが不均等だと思い、男性の詩人を「男性詩人」と記し、男性の研究者を「男性研究者」と書くこともある。いっそ「女性」という言葉を避け、シスジェンダーでヘテロセクシュアルな日本語母語者の男性詩人に(だけ)「男性」「日本語」「詩人」とつけばいいのでは、と思ったこともある。

また、榎本櫻湖が指摘するように、このトランスジェンダーの議論に、トランス男性が抜け落ちていように見えることも気になっている。トランス男性が、男性として生き、男性として詩を書く場合、彼の作品は「女性研究」の私の研究からは抜け落ちる、と私が考えているからだろうか。

このように悩んでいる矢先、本特集号に投稿したエッセイでも触れたような<事件>が起きた。2022年6月の東京のとある大学で、男性日本語母語者の文学研究者に「あなたのようなフェミニストが<女性詩人>と呼ぶから、こちらも男性詩人を<男性詩人>と呼ぶなければいけなくなった」と批判されたのだ。文学研究者の認識がこの程度であることに、絶望した瞬間だった。同時に、「女性詩人」と叫びつづけなければ、もしかしたら1940年

代、女性詩人らが傍流とも認識されず、巻末付録としてさえ認定されなかったあの時代に一瞬で戻ってしまうのではないかと、恐ろしくなった。

この問題は女性研究者だけが取り組んでも、解決しない。本特集号には男性の寄稿者もあり、頼もしい。今後、このような特集号をくまずとも誰もが安全に自由に性を語る場所が生まれてほしいが、そのような安全な空間を増やすためにも、フェミニズム研究には、シスヘテロ女性以外の参加が必要だ。そして、そのためには、シスヘテロ女性たちがもっとインクルーシブになることが必要だと思っている。

IV | 「逆」を考えたこと、ありますか？

フェミニズム運動の一環に「ミラーリング」というものがある。女性がセクシュアルハラスメントと感ずることも、男性には取るに足らないことだと思われることもある。そこで、「同じことを逆の立場でしかえす」ことによって、ハラスメントを理解してもらえるように使う手法だ。たとえば、男性上司や男性教員、男性の先輩詩人から、胸をじろじろ見られて「大きいね、何カップ？」と聞かれたとする。「触られたわけでもないのに」とか「褒め言葉」という人もいるが、逆に、女性上司や女性教員、女性の先輩詩人から、じろじろ股間を見られ、「何センチ？ 結構デカイ？」と聞かれたら、男性はどう思うのか。これを実際に「何センチ？ 結構デカイ？」とやりかえすのが、ミラーリングだ。韓国のフェミニズム運動家の話によると、ミラーリングをされた大抵の男性は激高するそうだ¹⁶⁾。

ここまで露骨ではないもうひとつの例を挙げたい。会議で怒り出した女性に対し、「ヒステリー」

15) 本アンソロジーは現在出版最終段階でまだ出版されていない。

「女性は感情的」という批判は英語圏でもおきやすい。しかし、よくよく考えると、重要な会議で怒鳴るのはむしろ男性に多いのではないか。重役についている人間の比率に圧倒的に男性が多い以上、重要な会議であればあるほど男性の出席者が増えるのだから当然であるといえど当然なのかもしれない。男性が激昂したときに、「ただのヒステリー」「更年期障害じゃないですか」「感情的になっている男性とは議論ができません」と、これまで女性が言われてきたことを言い返すと、男性は哑然として黙ることがほとんどだという報告もある¹⁷⁾。つまり、「逆」をされて、はじめてわかることがある。あるいは、逆をされるまで、優位に立っている人間は差別をしていることに気がつかないことがある、ということだ。

詩の世界でも、ミラーリングが有効かもしれない。本特集号で複数の女性が「逆はないのに…」と指摘していることは非常に興味深い(と同時に、ここまで「女性の詩人」らを追いつめてた文学界あるいは文学批評界の現状はあまりにもむごい)。平田俊子はその体験を「『女の書くものはわからない』と平然と口にする男もざらにいた。『誰その書くもの』ではなく、『女の書くもの』。『男の書くものはわからない』という女はいないだろうに。」と語る¹⁸⁾。

川口晴美も、「男性が『大変女性らしい詩で、私にはちょっと理解できません』と微笑と苦笑のあいだくらいの表情で言ったりする。[中略]なぜ男性の自分は『女性(らしい)』を理解できなくていいと思えるのか」と問いかける¹⁹⁾。さらに『私には難しく、うまく読み取れませんでした』みたいに言う人はよくいる。でも、『いかにも男性らしい詩で、わかりま

せん』と言う人は、まずいない」と、この問題を掘り下げている。

この「微笑と苦笑のあいだくらいの表情」を私も数えきれないほど見てきた。研究会で女性の詩人を取り上げる時、発表者の私に対して、あるいは取り上げられている女性詩人に対して向けられる表情だ。時にはそこに哀れみのような表情さえ読み取れることもある。そして、臆面もなく「(彼女たちの作品や名前を)知らない」「僕は詳しくない」と切り捨てる。そこから「知らないことが恥ずかしい」と無知を恥じるような感情は読み取れたことはほとんど皆無だ。

一度日本の学会で、中野鈴子(1906-1958)について発表したとき、鈴子の兄である中野重治の名を読み間違えたことがある。その時、大きな教室の会場後部から「しげはるっ」と野太い声で、罵倒が飛んだ。読み間違えを指摘してくれたのはありがたい。しかし、国会の野次を彷彿させるような罵声には驚いた。文学史上重要だとされる中野重治をうっかり読み間違えれば公の場で恥を知れとばかりに罵倒されるのに、英美子(はなぶさ・よしこ 1892-1983)の詩を発表後、「あの詩、あれ書いた女性ね、誰だっけ」と名前すら忘れて質問することは恥ずかしくない。むしろ、このような「無価値」だと彼らが一方的に決めつけている女性の戦中や戦前の作品など、読んでいたほうが恥ずかしい、とでもいうような、シス男性日本語母語者の文学研究者たちの「微笑と苦笑のあいだくらいの表情」。

川口が指摘する「詩に限らず、国語の教科書で出会う作品をはじめとして文学の書き手は男性がデフォルトで、私たちは常にそれを読み、理解するよう努力させられてきた」という現実を体感しない日はない。これが21世紀の「日本の」「日本文学研

16) 2019年同志社大学におけるシンポジウムで知り合った韓国のフェミニストから聞いた例は、すべて性被害に関するもので、私的な集まりでの会話で聞いたことも多く、記録には残っていない。

17) このような議論はたとえばAITA (r/AmItheAsshole) など実体験を報告しあい論じ合うサイトに散見される。

18) 「ハラスメントをなくしたい」p.71

19) 「声はここにある」p.34

究」の現実だ。若手詩人の小島日和が、本特集集
でこの点に触れていることは、今でもこの「男性が
デフォルト」の「伝統」が脈々と続いていることを
(悲しいことに)証明している。

小島は自分が女性が書いた詩に共感できない
ことがあるのは、「私が未だに男性的な視線で読
んでしまっているからなのかもしれない」と、自問し
ている²⁰。小島はそれを「書く立場」からとらえよう
とし、私自身はそれを「読む立場」からとらえよう
としているという違いはあるが、文学にたずさわる女
性であれば誰もが多かれ少なかれ直面する問題
だ。フェミニズムについて真剣に考えるようになった
この10年以上考え続けているが、この間にも
私はまだ答えを見つけていない。

たとえば、W. B. Yeatsの「He Wishes for the
Cloths of Heaven」という詩。イエイツの詩の中
でも有名な一篇で、学部生の時に初めて読んだ。ロ
マンティックな恋愛詩という位置付けのこの詩を、
私が「I(わたし)」は「男」で、恋する女性にあてて
書かれたものと無意識に解釈していたのは、なぜ
だろう。私自身も、男は女を守る立場で、男が女を
幸せにするための「天上の布」がほしいと望むこと
に、違和感を覚えることもなかったからだろうか。

Had I the heavens' embroidered cloths,
Enwrought with golden and silver light,
The blue and the dim and the dark cloths
Of night and light and the half light,
I would spread the cloths under your feet:
But I, being poor, have only my dreams;
I have spread my dreams under your feet;
Tread softly because you tread on my dreams.²¹⁾

20)「書く」私と『生活する』私」p.81

21) 高松 雄一編『対訳 イェイツ詩集』からの和訳は以下の通り。

金銀の光で織りあげて
刺繍を施した天上の布があれば、

イエイツの悲恋と重ねて、自伝的に読んだせい
もあるのかもしれないが、20歳前後であった私は、
この詩を授業の教え通り「恋する女性に対して男
性が描く」「ロマンティックな恋愛詩」と解釈した。
日本の大学で私に文学を教えてくれた教員は、全
員男だったことが関係しているのかいないのか、私
には判断できない。しかし、30年後、この詩を読み、
私は意外にも不快に感じた。男性の書く女性像に
嫌悪感や不快さを覚えることは少なくないので、そ
のこと自体には驚きはないが、この詩があまりにも
男性視点であることに嫌気がさした気がした自分
に驚いたし、このことに若い頃には気がつかなか
ったことにも驚いた。

ダブリンのTrinity College 大学院でアイルラ
ンド文学を学んでいた時、私の詩の先生だった詩
人のブレンダン・ケネリーは授業でイエイツの詩を
とりあげ、「こんな風に描かれたら、モード[イエ
イツの長年の片想いの相手であったモード・ゴン
という女性]もそりゃいやだったと思うよ」と言及し
たことがある。20代の私にはその意味がよくわか
らなかった。でも、今ならわかる。逆に言えば、50歳
ちかくなるまで、私にはわからなかった。これは、
「文学の書き手は男性がデフォルトで、私たちは常
にそれを読み、理解するよう努力させられてきた」
からで、シスヘテロ女性の私が文学研究者として
生きていくことは、つまりこの「男性デフォルト」の
世界で「男性的な視線で読」むことに他ならなかつ
たからではないか。

小池昌代は控えめに「あまり性差を言いたくな
いけど、読み方の違いはやっぱりある気がする。も
しかしたら、いわゆる男性詩人には読めない詩、わ
からない詩というものが[「女性詩」には]あるのか
もしれない」と指摘²²⁾。本特集号の鼎談は終盤、

夜と、光と、薄明かりで作った
青と、薄墨いろと、黒いろの布があれば、
その布をあなたの足もとに広げたらうが。
だが貧しい私には夢しかない。
私はあなたの足もとに夢を広げた。
そっと歩いてくれ、私の夢の上を歩くのだから。

男性が描く不快な「女性像」に話題が軽快にうつってゆく。私は、「男性の書く女性像に嫌悪感や不快さを感じることは少なくない」と先に述べたが、正直に言えば、日本語文学の中で男性作家に描かれてきた女性像を不快に思わなかったことはほとんどなく²³⁾、それが若かりし日の私が日本語文学から遠ざかった理由でもある。そして、それが研究対象になった今、「女性」文学に特化することになった最も大きな理由だと思う。例外は、唯一、川端康成の作品であったが、その理由は自分でもわかっていない。鼎談で、小池が「川端には両性具有的なところがあって、男の暴力性をよくわかっていて、女を慰謝するというか、女を生き延びさせるようなところがある」と述べていて²⁴⁾、腑に落ちた。川端の描く女性も理想化美化されているし、明らかに男性視線で女性を見ているにもかかわらず、私が不快に思わないのはなぜかずっと疑問であったが、川端は「男の暴力性をよくわかっていて、そのうえで女性を描いているのかもしれない。その「女を生き延びさせ」ている川端の視点に私は蔑視や性的対象物としてのみ女性を見ているのではないなにかを感じ、書き手の男性の身勝手さを感じないのかもしれない。

このような「男性デフォルト」の伝統の中にどっぷりつかって教育を受けてきた女性研究者である私は、これまでこれらの謎解きはひとりではなければならぬと放り出されてきた(と、感じてきた)。日本国内では、まわりがほとんど全員男性教員だったのだから、仕方がないかもしれない。本特集号のような「場」を設けてもらったことによって、小池の上記の発言に出会えたことの意義は非常に大きい。小池は、2018年のキャンベラ国際詩祭のゲスト詩人だった。その時に、オーストラリア国

立植物園でいろいろな話をした。でも、「フェミニズム」や「女性」のことについては、深く踏み込まなかった。それが「フェミニスト特集を組む」ということになれば、誰もかれもが、フェミニズムについて語る。この企画がなければ、私は川端康成の女性像に、自分が感じている「なにか」を共有してる人が他にもいることをずっと知らずに、これからもひとりで闇を抜けるために手探りで歩かなければならなかっただろう。

本特集号で水田宗子が「『文学は思想の器である』(吉本隆明)といっても、それは男性文学、男性作家に限られており、戦後の言論界における蔑視、指摘領域からの女性の排除は目を覆うばかり」と辛辣に批判するように²⁵⁾、女性の詩人以上に女性の批評家の数は少なく、女性文学研究者の数も多くはない。文学研究者として、私は「私」の視点から、詩を読み、分析できているのだろうか。私は「男性の視点から読む」という呪縛からほんとうに自由になれているのだろうか。このような、自分の研究の土台が揺らぐような不安を、男性の視点を押し付けて、それを当然だと信じて疑わないシスヘテロ男性文学研究者たちは、一度でも感じたことがあるのだろうか。一度(と言わずに二度でも三度でも)、考えてみてもらいたい。

V | 経済格差と詩集出版のこと

女性と男性の所得に差がある。日本では特に、女性が生涯正社員で働き続けることは、男性と比べるとずっと少ない。多くの女性が、結婚や出産を機に離職し、非正規雇用やパートに切り替わる。このことと、詩人になることにどのような関係があるのか、疑問に思う人がいるかもしれないが、実は大

22) 前掲鼎談、p.22

23) 当時は今よりもずっと、日本の小中高校及び大学の授業で扱う文学作品は圧倒的に男性のものが多く、文庫で気軽によめる文学作品も多くが男性の書き手によるものだったせいもある。

24) p.27

25) 「世界戦争を経たフェミニズム表現」p.54

きく関連がある。日本の、と書くことは憚られるが、英語圏に比べるとやはりこは「日本の」とあえて書く必要があるだろう。日本の女性のおかれた社会的立場、あるいは家庭内の立場は、日本国内で、あるいは国際社会で思われている以上に、弱い。

2022年のキャンベラ国際詩祭で、私がひとつのエピソードを披露したところ、会場の空気が驚きでゆらいた。私の知るその女性の詩人は、家族に隠れて詩を書き続けていた。東日本大震災を体験し、その体験を書いた詩が、ある震災詩賞を受賞した。その時彼女の胸に浮かんだのは、この受賞で、自分が詩を書いていることが夫にばれたらどうしよう、ということだった。私は彼女に、東京での朗読会で詩を朗読してくれないか、依頼をした。光栄です、と喜びをかみしめながら、彼女は「でも、夫に知られないように東京往復をするためにどうしたらいいのか……」と悩みを打ち明けた。

2019年、そんな彼女から、一冊の詩集が届いた。「詩のイベントで謝金をもらえたので、自費出版で詩集を出すことができた。自分の詩集を出版できる日がくるとは、夢にもおもったことがなかった。人生で最初で最後の詩集、幸せです」というようなことが書き添えてあった。彼女の詩集は、私の書架にならぶ何百冊もの詩集のなかで、もっとも誇らしい、美しい詩集だ。

川口晴美も本特集号で、忘れられないエピソードに触れている。「何年も前、社会人向けの講座で熱心に詩を書き始めていた女性が、あるとき『私が詩を書くのを夫が嫌がるから、夜中にこっそり起きてキッチンで書いているんです』と話してくれた」そうだ²⁶⁾。その女性はしかし、講座に来なくなってしまった。理由はわからない。

こんな女性が他にどれだけいるのだろう、と考えてしまう。性的マジョリティで権力を握っていることに気づいてさえいない、シスヘテロ男性にこの気持ち、女性がおかれた立場が、このような立場に置かれ続ける女性たちが詩を書くことの勇気が、わかるのかどうか、問わずにはいられなくなる。小池昌代ははっきりと「報復が怖くて何も言えなかった」と書く²⁷⁾。報復が恐ろしくて発言ができない、書きたい詩が書きたいように書けない。そんな気持ちを抱えて書く、女性の立場を、シスヘテロ男性は想像したことがあるのか。「いい詩」「文学史上に残る価値ある作品」とはなんなのだろう。それが、シスヘテロ男性の「心に響く詩」であるならば、私たち、シスヘテロ男性以外の者の「声」は、誰にひろいあげてもらえるのだろう。

さらには、出版にかかる費用が大きい、という日本特有の問題もある。今ではオンデマンド出版や電子ジャーナルなど、詩の出版選択も増え、印刷費用も各段に安くなった。とはいえ、文学者に「適切に」扱ってもらえる詩の出版社は限られており、詩集出版費用も高額だ。5、6年前のことだ。全国に知られる文学賞を複数受賞しているある女性の詩人から、「詩集を出版できるだけの詩はもうとくに準備できているのだけれど、出版費用が準備できていないので」次の詩集出版はまだ先になる、と説明を受けたことがある。これだけ賞をとっている彼女がこのような問題を抱えているとは夢にも思わず絶句した。同時に、彼女でさえもこのような問題を抱えているならば、他の女性詩人のおかれている状況はどのようなものなのかと、考え込んでしまった。

シスヘテロ男性詩人にも、「資金不足で出版できない」という人はいるだろう。近現代詩の歴史を見

26) 「声はここにある」p.36

27) 前掲鼎談、p.23

れば、詩の道を選んだからこそ、貧困にあえぎ死んでいった男性詩人もいるし、文学と貧困はジェンダーの問題ではない、という人もいるかもしれない。とはいえ、女性の書き手がおかれている現状は、日本社会の女性蔑視、格差社会を反映しており、シスヘテロ男性以外の経済状況がより厳しいのは明らかだ。

文学界における女性蔑視や差別、ジェンダーの問題の解決にむけて、文学者が努力をつづけることはもちろんだが、社会全体が、日本社会が抱えるジェンダーの問題に真摯に向き合うことも欠かせない。W. H. Audenの「Poetry makes nothing happen. (詩は社会を変えない)」は世界中で一世紀以上にわたりさまざまな議論を生んでいるが、私は詩には人々の認識や社会をかえる力があると思っている。女性の詩人が女性の「声」を詩作品で社会に届けることは、社会がジェンダーについて考える機会を与えるという意味でも、大きな意義があると信じている。

■ むすびにかえて

詩の研究をするなかで、「(男性によって築かれてきた)女性像のステレオタイプ」から落ちるがために研究からごぼれ落ちてきた(と私が考える)女性の声をひろいあげたいと思うようになり、そのような女性詩人らの作品に着目してきた。私が編集した現代日本女性詩対訳アンソロジー『Poet to Poet: Contemporary Women Poets from Japan』(2017年)を手にしたアメリカの日本文学研究者から、「あまり知られていない詩人の作品が入っていますね」と率直に言われたこともある²⁸⁾。

28) 批判的な意味ではなく、「あまり知られていない詩人の作品が入っていて、すごくおもしろかった」と彼は喜びを伝えてくれた、ということを取録された詩人らの名誉のためにも明記しておく。

「(男性によって築かれてきた)女性像のステレオタイプ」から落ちるような作品を研究対象にした理由は、単純に、「(男性によって築かれてきた)女性像のステレオタイプ」が描かれる作品に面白みを感じなかったからだ。私が面白いと思った女性たちの作品は、みな「規格外」の女性像を描いていて、私にはそのほうがずっと「しっくり」きた。男性がいう「女性らしい作品」よりも、私にはそれらの「規格外」作品のほうがずっと「女性らしい」と思えた。私がここでいう「女性らしい」とは、女性の人生の現実をなんらかの形でとらえている、現実味がある、というようなことではなからうか、と考えているが、定義は難しく、定義なんぞするまでもなく、こんな言葉など消滅してほしい、と思っている。しかしこの、主に男性によって発言される「女性らしい」という言葉について、ひとつだけ確信を持っていえることがある。シスヘテロ男性がいうところの「女性らしさ」は、私が考える「女性らしさ」はまったく接点を見いだせないほどに大きく乖離している。

オーストラリアで2017年に刊行されたフェミニスト詩誌『Not Very Quiet』の発行人のひとりである詩人Sandra Renewは、「何十年も戦いやっと手に入れたと思った権利が、一瞬で奪われることがある。だから、私たちは安心しきらず、しっかり見張り続けなければいけない」と語る²⁹⁾。アメリカで墮胎権が略奪され、イランではヒジャブから髪がでていたという理由で22歳の女性Mahsa Aminiが警察に殺害されたとみられる事件がおきるのが2022年の現状なのだ。これらに対し世界中で大きなデモが起きていることには勇気付けられるが、このように一瞬で女性が自由に生きる権利がなかった時代に引き戻されてしまうことが現実には次々とおこると、そのうち、90年代まで避妊具

29) 2022年9月、キャンベラでおこなったサンドラ・レニューとのインタビューにて。未発表。

を買うことができなかったアイルランドに、女性には参政権も投票権もなかった戦前の日本に、戻ってしまうのではないかと恐ろしくなる。非現実的だと笑うかもしれないが、そんな非現実的なことが、実際に世界中で起きている。詩人で文学者の中村和恵が指摘するように、女を個人、人間としてみなさず「性的消費物とみるのは自分に都合がいいからやめたくない」との想い³⁰⁾、女権なんてなかった時代の方が「都合がいい」との想いが、この世界には渦巻いていて、私たち女性がどんなに足掻こうとも、暴力的に襲いかかってくるのだ。

川口晴美は詩を書くことをあきらめてしまったかもしれない受講生の女性に対し、「彼女が書こうとしていた詩が存在していたことを私はずっと覚えていようと思う。声はそこにあった」と述べている³¹⁾。覚えていること。記録に残すこと。声に耳を傾けること。この姿勢が文学研究の基盤にないならば、いったい、私たちはなんの研究をしているのだろうか。詩とは「声」ではないのか。

さまざまな問題をかかえるフェミニズムではあるが、本特集号に掲載されている深沢レナの詩「怪物たち」を読み³²⁾、女性はどうにも巧妙にねられた分断の罠にもはまらず、きつと連帯できる、と希望がみえた気もしている。自分とはまったく違う、恵まれた環境に育った女性、結婚をして子どもにも恵まれている女性、「絶対こいつとは仲良くなれない」(第1連第2行)「マジむり」(同第6行)と思ったその女性と、「うんこ」(同第7行)と互いに呼び合いながら続く女性同士の友情の詩だ。「しあわせそうな女性を殺してやりたいと思った」(第7連第1行)と、2021年8月に小田急線でおきた無差別死傷事件にふれ、そのニュースを聞いて、しばらく会っていないこの女友達の安否をおもい、無事に

ほっとする。女の身体を持っているというだけで、殺害のターゲットになる。これは小田急線事件でも、イランの女性取り締まり事件でも同じだ。

榎本櫻湖が述べるように、「存在の無視も立派な差別」だ³³⁾。だからこそ、榎本が訴えるように、「わたし／たち」は連携し、「あらゆる性差別や性暴力にたいして、無視を決めこんだり、優先順位が低いことだとあとまわしにすることなく、真摯にむきあって、誰もが生きやすい社会の実現にむけてともに歩んでいくべきなのだ」³⁴⁾。

そのためにも、「わたし／たち」は沈黙しない。「わたし／たち」は沈黙すべきでない。シスヘテロ女性に属する私が、フェミニズムについて、女性詩について語るときには、本特集号に吐露されたひとりひとりの想いを心にとめて、発言したい。「わたし／たち」ひとりひとりが、その努力をすれば、それは大きな声となるはずだ。そして、小磯洋光や赤司琴梨が主張するように、「自分の声を発する場所」や「詩を書く場所」は「安全」でなければならない。詩の書き手も、読み手も、「安全な場所」を築いてゆくための一歩を踏み出せるということを、本特集号は示してくれた。そして文学研究者は、そのような「安全」な場所をつくることに貢献すべき立場であり、それを脅かす存在であっては決してならない。

参考文献

- 『現代詩手帖 特集わたし／たちの声—詩、ジェンダー、フェミニズム—』2022年8月号(思潮社)
- 『現代女流詩人集』(1940年、山雅房)(編集復刻版『日本女性詩集[1930年～1943年]』不二出版2014年)
- 高松雄一編『対訳 イェイツ詩集』(岩波書店2009年)
- 『日本の詩歌27 現代詩集』(中央公論社1976年)

30) 「性別グラデーションあるいはごく日常的な生と尊敬の話」p.75

31) 「声はここにある」p.36

32) pp.46-50

33) 「マツコ・デラックスになりたかった」p.66

34) 同p.69

- ◎“Feminism’ is Merriam-Webster dictionary’s word of year” BBC News (2017年12月13日) <https://www.bbc.com/news/world-us-canada-42337596> (2022年9月30日)
- ◎ Jeffares, A. Norman, ed. 『Yeats’s Poems』 (MacMillan, 1989)
- ◎ Kikuchi, Rina & Jen Crawford, eds, 『Poet to Poet: Contemporary Women Poets from Japan』 (Recent Work Press, 2017)

The Importance of Creating Safe Space:

The Special Issue on Poetry, Gender and Feminism, *My/Our Voices* (August 2022),
Gendaishi Techo, Contemporary Poetry Journal from Japan

Rina Kikuchi

Why do we still need special issues and special journals focused on women and feminist poetry? Aren't we living in the liberated 21st century? This paper discusses the importance of creating a safe space for women and sexual minorities to discuss gender related issues, and how we all (including cis-heterosexual-men) can be part of this safe space, and part of creating this safe space. Reflecting the recent feminism and anti-feminist movements across the world, such as the overturning of abortion rights in the US, a misogynist murderer in a Tokyo train in 2021 and Iran's female-led revolt after the death of Mahsa Amini 2022, this essay explores what 'our' voices can do and what role 'our' voices can play by examining the articles and poems published in *Gendaishi Techo's* special issue on poetry, gender and feminism. Does poetry really make 'nothing happen'? This paper discusses the comments, articles and poetry of the poets and scholars published in this August issue and beyond, including Ito Hiromi, Koike Masayo, Kawaguchi Harumi, Mizuta Muneko, Enomoto Saclaco, Fukazawa Rena, Hirata Toshiko, Nakamura Kazue, Koiso Hiromitsu, Kojima Hiyori, Aomoto Yuzuki, Akashi Kotori, Brendan Kennelly, Sandra Renew and others whose names do not appear for privacy and individual safety reasons.

